

第2表 出土遺物（瓦）観察表

No	器種	出土遺構等	法量			その他
			口径	底径	器高	
55	瓦	SH5	最大長 (7.5)	最大幅 (8.7)	最大長 (1.6)	表面にミガキ痕

第3表 出土遺物（石製品等）観察表

No	器種	出土遺構等	法量			その他
			口径	底径	器高	
50	硯	SE3	最大長 (6.4)	最大幅 (7.1)	最大厚 (2.6)	砥石を転用
51	敲石？	SE3	最大長 4.9	最大幅 5.2	最大厚 3.2	

第4表 出土遺物（金属製品等）観察表

No	種別	器種	出土遺構等	法量			その他
				口径	底径	器高	
1	銅製品	半銭	SC1	最大長 2.1	最大幅 2.1	最大厚 1.1	
52	鉄製品	不明	SE3	最大長 5.0	最大幅 4.7	最大厚 2.0	
53	鉄製品	釘（鏝）	SE3	最大長 (7.0)	最大幅 (3.9)	最大厚 (0.9)	
54	鉄製品	釘（鏝）	SE3	最大長 (8.2)	最大幅 (1.8)	最大厚 (0.7)	

包含層等

包含層より上層は、近・現代に形成された。

遺物（第11図No.60～No.67）は、新しい遺物の外に、少しではあるが近世の遺物も混入している。60は18世紀後半から19世紀代の肥前系広東碗である。61は17世紀中頃の肥前系と思われる小杯である。62は19世紀台の瀬戸・美濃系の鉢である。63・64は17世紀後半の肥前系の碗である。66は近・現代であるが、用途は不明である。

第Ⅲ章 まとめ

調査を実施した第37地点は、地頭仮屋からみるとその東側の区画のひとつにあたる。調査地の北側に東西に延びる街路があり、それに面して神崎家武家門等も残っていることから、今回の調査地も地頭仮屋に近い郷土屋敷群の一角に位置すると思われる。

今回の調査では、主な遺構としては井戸が2基と溝状遺構が確認された。井戸は、高岡麓遺跡28地点で確認された井戸枠を持つものとは異なり、第1地点で確認されたものに類似している。溝状遺構（SE3）としているものは、その一部が確認されただけで、遺構の性格はわからないが、区画的要素を認めるとすれば、屋敷割りや街路形成も考慮してみていく必要があろう。

遺物では、17世紀代の遺物が比較的多く出土している。これは、今回の調査地が地頭仮屋に近いこともあるであろうが、麓形成の変遷を考える上では重要である。

何れにしても、調査面積が狭く、調査地の性格を解明するまでには至らなかった。